

# 緑の地球 GREEN EARTH

地球環境のための国境をこえた民衆の協力

- ワーキングツアー座談会 ..... P 2
- 「チコロナイ」現地訪問レポート ... P 5
- 「環境市民」ってどんなところ? ... P 6



豊丘県落水河郷三山村で植樹作業。深さ80cmに掘った穴を、表土で途中まで埋め返してから植樹する

1995・4

35

1995 春の黄土高原ワーキングツアー

# 「植えたアズの花が咲くころ、 もう1度...」

「ワーキングツアーをほんとうに出せるの?」。あの震災と救援活動のなかで周囲をやきもきさせましたが、第1団10名、第2団9名の参加があり、中国側の大歓迎のなかで、りっぱな成果をあげて帰国しました。参加者はもちろん、私たちにとっても忘れることのできない活動になりました。

第1団は3月末から渾源県、靈丘県、広靈県で充実した作業が待っていました。各県の指導者、村民、子どもたち

といっしょにしっかり汗を流し、そのあとの歓迎交流会も大きくもりあがりました。

第2団は4月上旬から大同市南郊区での「地球環境林センター」起工式にはじまり、陽高県、天鎮県、渾源県と駆け足で回りました。列車の遅れや天候不順などで作業を十分できなかったのが心残りですが、万里の長城のある村での植林、大同炭鉱の「万人坑」など、とても印象ぶかい旅でした。

ワーキングツアーが終わりに近づくと、毎回、来年もきたいという人がたくさんでできます。ところが今回は2つの団とも、2回目、3回目の参加者が多く、行く先々に「老朋友」がいて、積極性を発揮したことが全体にとってもいい作用をはたしました。去年はおとなしかった嶋田君が、すっかり化けたのは驚きでしたよ。

そのような積み重ねは、黄土高原における緑化協力の基礎が固まりつつあることを意味し、ほんとうにうれしいことです。

緑色地球ネットワーク大同事務所のメンバーとじっくり話しあったのですが、その内容は次号以降で報告したいと思います。(高見)

## 1995 春のワーキングツアー座談会第1弾

# 気持ちはずうじるんですね

## きめの細かい対応をつづけよう



広靈県で。子どもたちはどこでもかわいい

95年春のワーキングツアーは、2班合計19人が参加しました。

日誌に記された感想などはおいおいご紹介していくとして、今号では第1団の座談会の様子をご紹介します。

4月1日、広靈賓館にて。(記録：嶋田、文責：東川)

●竹中 隆(世話人・団長) 去年にくらべて地元との信頼度、密着度が高まっていますね。これは日本で誇って話せることです。

地元の物産品(ジュース、石材、そば)を検討し、経済を底上げして収入

のめどをつけることで、環境問題の見方も変わるんじゃないかと思えます。私自身もいろんなものを日本に紹介していきたい。

●新妻健治(会社員) 高見さんと同室でいろんな話を聞いて、目が開かれてきました。でも、自分で消化できてないので、帰国してからもう少しゆっくり自分なりに考えようと思えます。

昨日穴掘りを

してる時、地元のおじさんが、僕の掘った穴を掘り直していた。何度も何度も掘り直すんです。このような意気込みがこの運動の成否のキーポイントではないかと思えます。

●浜田秀孝(学生) 軽い気持ちで来ましたが、厳しい現実を見てしまった思いです。農村の食事の時に農民の声が聞けなかったし、ホテルでも幹部の話を書く

機会がなかった。そんな場があるといいですね。

●藤井久生(学生) 参加した動機は、テレビでこの取り組みを見たこと。実際に来てみると、思ってたよりはるかに厳しい条件でみんながやっていますね。この気候、風土を感じ、見て、カメラをつうじて見た世界では感じられないものがありました。まだ十分に理解できてはいないんですけど。

自分は日本の生活をそのまま持ち込んだようなかたちになっちゃったけど、村の生活をかいま見て、村の人が多く集まり、団結しているのを見て、このような気持ちを日本でも取り戻さないといけないんじゃないかと思ってます。

●竹中 浜田さんの言われることはよくわかりますが、私は、中国側の人たちが去年よりは身近に接してくれてい



広靈県平城郷で。アズを植えるために穴を掘る



せいっぱいおしゃべりした子どもたち。作業の合間にひとやすみ

場に足をはこんで感じることができてよかった。

私は中国語ができて、地元の人からも「得だね」と言われたけど、自分でもそう思います。言葉は、大切です。

●大林由美子（学生）  
参加したのは、新聞でやっているのを見て面白そうだと感じたから。あまり大きなことは考えていませんでした。

でも、ここで実際の

生活を見ると、水くみも大変で砂も飛んでくる。こんな生活は大変だなあと感じています。

村の人との交流はよかったけど、言葉がわからなくて残念だった。けど、村の人と組んで作業すると、言葉がもうじなくてもいろいろ教えてくれるんです。気持ちはつうじるんですね。でもやっぱり言葉は知りたいけど...

このツアーにはまた参加したいけど、どこまで深入りしたらいいのか...

●石田和久（無職） 私は“ふるさとの山清掃登山”というのを15年来やっています。でも、それだけではどうにもならないというので、いろいろな情報を集めていました。このツアーには、昨年参加しようと考えていました。今年参加してみて、快適な旅ができてよかった。今度は緑たわわなころに来たいものですね。

ここへ来てみて、すごいところだと感じています。ただ、ワーキングツアーと銘うってるのに、ちょっと作業時間が短い気がしましたね。食事の用意でずいぶん待たされたのが残念です。

また、毎日昼も夜も乾杯せめて、お客さんなのが残念でした。昼くらいは村の人と同じもので、と思うんですけど。

日本では、もう少し世論がもりあがってくれるといいなあと思います。水や緑の大切さを訴えたいですね。

●石田豊子（無職） まだ気持ちがまとまっていないので何ともわからないけど.....。また来たい、かなあ？

ると感じています。村の人が厳しい生活のなかで精一杯歓待してくれるのは、気の毒のような気がするけれども。

●浜田 でも、主人が誰だかわからないような感じですよ。

●高見 みんな客好きなんですよ。いきなりぱっと訪ねてもそうですから。

●竹中 美德のようなものでしょう。一生懸命、応えてくれているんです。

●嶋田光雄（世話人・学生） 自分がこの運動にかかわりはじめたのは、総論として“地球環境を守る”ということに賛同したから。でも、現地をふむと、総論でははじまらないことを痛感します。いいことだから...ということで、上からの声で下が動くかといったら、とんでもない。やっぱり、村の人のなかで、その人たちの生活の一部としてやっていけるような活動にしなければ、はっきり言って、なんにもならないと思う。各論的な対応、きめの細かい対応を続けていくことが必要だと痛感しています。

●谷口英子（学生） “地球環境を守る”と言われた時に、私は、まず自分の身の回りのことをやらずに何になるのかなと思っていました。だから一足飛びに中国に来るのはどうかかって...

私は外大で紙を大切につかおうということをやっているけれど、みんなにあまり受け入れられなくて非力に感じていました。

実際ここに来て感じているのは、必要最小限でいいという生活がある、ということ。机の上だけで満足せず、現

## 95夏のワーキングツアーのお誘い

早朝や夕暮れの農村のおだやかに澄みわたった空気、運良く停電になれば降るような星空。夏のワーキングツアーは植林作業こそ少ないけれど、農村生活を体験して、地元の人たちとの交流を楽しむ時間はたっぷりあります。「少しでも言葉ができればよかったのに」という声は今までの参加者から多く聞かれましたが、今から少し勉強をはじめて、夏の黄土高原ワーキングツアーにそなえませんか。G E N代表の立花吉茂先生を団長にむかえて、黄土高原の珍しい（あるいはありふれた）植物のお話もいろいろ聞けますよ。

●日程 7月25日（火）～8月4日（金）  
※関西新空港発着

●費用 23万円（航空運賃、中国での宿泊費／食費／交通費、ビザ取得手数料、G E Nの会費1年分を含む。学生21万円）

●定員 20人（先着順）

※航空便のつごうで、日程・費用とも変更になる可能性があります。

■お問い合わせはG E N事務所まで。

Tel. 06-583-1719 Fax. 06-583-1739



## 国際開発救援財団 助成決まる

黄土高原での緑化協力は、日本・中国双方で大きく広がりつつありますが、今年度から新しく国際開発救援財団の助成が決定しました。

金額は113万5千円で、地球環境の建設に使われます。

# 黄土高原の緑化協力・多様化する意義

GEN世話人 高見 邦雄

2つのワーキングツアーが大同を訪れたとき、私たちのカウンターパート・大同市青年連合会はもうひとつ大きな活動をかかえていました。青年団中央などが主催する貧困地域を助ける全国会議が4月17日から大同で開かれることになっていたからです。

大同市の青年たちは、緑の地球ネットワークと共同ですすめている緑化事業を大同市における主要な活動のひとつとして会議で紹介する、代表たちをプロジェクト現地に案内する、といて張り切っていました。

いま大同から届いたファックスによると、会議は成功をおさめ、私たちの共同のプロジェクトは24の省の代表たちの強い関心と称賛を呼んだそうです。

中国が改革開放政策をとり、条件のあるところが先に豊かになり、条件のないところを引き上げる、というスローガンをかかげてから、東部沿海地方を中心に急速な経済発展が現れました。しかし、内陸部を中心とする困難地域がそれに引っぱられて発展したかという、そうはうまくいっていません。

完全に取り残され、新しい困難な問

題ももちあがって、格差はさらに広がりました。私たちの協力地でも、県の職員の賃金が3か月ストップしているところもあります。鉱工業のあるところはまだしも、農業だけの県はほんとうに苦しいのです。

すこし前に開かれた全国人民代表大会でこのような問題がとりあげられ、さまざまな正策が検討されました。青年団の会議もそのなかのひとつなのです。

霊丘県の県長は、ワーキングツアーのメンバーたちに、緑の地球ネットワークの協力活動は、1. 環境を緑化する、2. 貧困地域の児童たちの就学を保障する「希望プロジェクト」の一環、3. 貧困地域の自立を助ける、4. 新しい内容の国際交流という4つの意味をもつ世紀をまたがるプロジェクトだと述べました。

この県には日中戦争にさいして日本軍が八路軍にはじめて大敗した「平型関」があり、その後の三光作戦によってたいへんな被害を出しました。私たちがこの県を訪れたのは3月30日でしたが、ちょうど50年前のこの日、日本

軍が最終的にこの県を撤退したそうです。

そのような日に、みなさんのような日本人を迎えることができるともうれしい、と述べたあとで、県長は先ほどの話につづけたのでした。

地球環境の問題を「南」の地域の現実のなかで考えよう、といてスタートした私たちの協力活動は、この県長がまとめたような内容をしだいに備えてきました。

昨年ここをはじめて訪れ、ことしのワーキングツアー第1団の団長をひきうけた竹中さんは、「高見くん、ここまできた事業を後退させるようなことがあったら、戦争をしかけるよりまだ悪いぞ」とプレッシャーをかけます。

現地での植林活動ひとつとっても、困難な課題はたくさんあります。でも立花吉茂代表はじめ専門家たちの参加と協力の輪もしだいに広がり、いろいろな可能性がみえてきつつあります。

くわしくは次回に紹介しますが、ことしになってからでも、たくさんのグループが黄土高原での緑化に協力しようと名乗りをあげておられます。

私たちの協力事業は準備の段階から、実質的なスタートへと移り、「ネットワーク」もその内実を備えつつあるようです。がんばりましょう！

## 地球環境林センター 起工式開かる

1995年4月8日、ワーキングツアーの第2団をむかえて、大同市南郊区平旺村の地球環境林センターの起工式がおこなわれました。実験区、育苗区などをそなえ、今後の緑化協力の中心となるところだけあって、中国側からは大同市の副市長をはじめ、行政、林業の関係者が多数出席、関心と期待の高さをうかがわせました。日本の在国大使館は村山首相の訪中準備のために多忙で、出席はしていただけませんでした。下荒地公使から次のような祝詞をファックスでいただきました。

このたび、緑の地球ネットワークが

山西省で実施する黄土高原における緑化協力プロジェクトの中心となる地球環境林センターが起工されることになりました。心からお祝い申し上げます。あらためて申し上げるまでもなく、



起工式で花と野菜の種子が手渡された

日本のNGOである緑の地球ネットワークは、これまで山西省の友人のみならず、協力をえて、植林等の環境改善の活動をおこなってきました。日本と中国のボランティアの方々を手をたず

さえて一つの目標にむけて努力するという草の根協力は貴重なものであり、これからの日中協力の一つの方向を示唆するものと考えます。

今回のセンター建設がこうした協力関係のより一層の発展のきっかけとなることを期待しています。

1995年4月8日

日本駐華大使館 公使  
下荒地 修二



## 「チコロナイ」現地訪問レポート

GEN世話人 円満堂 修治

軽トラックの荷台にわれら現地訪問団5人は乗り込んだ。いつもより雪が少ないというものの、北海道二風谷の朝の空気は冷たい。貝澤耕一さんの操る軽トラは、やがて林道の急斜面をウンウンとエンジンをうならせながら登りはじめた。見渡すかぎりはマツの人工林で、自然林などほんの一握りにもおよばない。

私たちは目的地に着くと、荷台から威勢よく飛び下りた。各々手にはまさかり、斧、なた、そしてのこぎりの類を持っている。なんと、貝澤さんなどはチェーンソーにガソリンを注ぎはじめた。何を隠そう、私たちは緑を愛するとは名ばかりで、今からこの一帯の木を切り出すのである。

「ブーンッ！」

チェーンソーの音が朝の森の静寂をつきやぶる。

「ビキビキ、バサーンッ！」

一本、また一本と直径3、40センチもあるストロブマツが轟音をたてて倒れる。たとえ人工林であっても、木の倒れる光景は痛々しい。知らず知らずのうちに、口の中で「スマンな、スマンな」とつぶやく。……実はこの作業、貝澤さんの計画しているログのゲストハウスを作るための材木なのである。私たちがその手伝いをしているのであ

って、決して森林破壊の手伝いをしているわけではありません。もちろんこの山も貝澤さんの山で、間伐も兼ねているので心配は無用です。それに間伐をした場所は陽が差しこみ、待ちかまえていた小さなミズナラやカツラなどの広葉樹が育ち、やがて自然林に回復するだろうという企ても裏に隠されています。

それよりもなぜゲストハウスをすることになったのか？ これは私の勝手な推測にすぎないのですが、貝澤さんを慕って、全国各地から大勢の人がどんどんと詰めかけるからなんだと思います。私自身も今回はじめて貝澤さん宅にお邪魔して、それがよく理解できたのです。耕一さんはもちろんのこと、奥さんの美和子さんもとても明るく、そして私たちのことをよく理解してくださって、あいさつをする前からまるで昔からの知り合いのような印象でした。また何より家庭がこの上なく楽しく明るく、そして温かいのです（そうそう、美和子さんの手料理も最高）。これが全国各地から貝澤さんを慕い集まって、そのあげくの果てにゲストハウスを作るのに至ったのだと思うのです。多分これは当たっているという自信はあります。

森の中で切った丸太をトラクターでひっぱりながら考えた結果、「森を守るのもよし、ボランティアをするのもよし、されど貝澤さん宅のような温かい家庭を作るのが基本かな」という答えが出ました。しかし、空気もうまかった。

ナショナルトラスト『チコロナイ』運動を中心にこんなことも含め、いろいろな人との輪が広がっていくのが楽しみです。  
1995.4.14.



森を見て回る貝澤さんと参加者

### 「チコロナイ」部会のお知らせ

日時：5月13日（土）16時～18時

場所：GEN事務所

テーマ：チコロナイの趣旨と今後の方向（武田繁典世話人の話）

連絡先：武田繁典

Tel./Fax. 0727-63-4171

## 「聖なる森と共に生きる、アイヌ」

～武田繁典さん講演会～

環境市民ボランティア 藤本 芳一



いま世界各地で先住民の権利が非常に注目されています。先住民の中には自然と共存して平和に暮らしてきた人たちが大勢いました。彼らの生活を知ることが私たちの生活を変えていく手がかりになるのではと思います、そういったお話をさせていただける人として、「環境市民」が主催する「野の塾」の講師に武田さんをお願いしました。

まず、「私たちは多種多様な生きものが集まったところでやすらぎを得ることができる」という武田さんの話にうなずきました。私たちは経済的な発

展のために多様性を犠牲にしてきました。すべてに能率が優先され、学校教育も人間を試験の点数という単一のものさしで測ってきました。しかしそういったなかからやすらぎは得られません。また、多様性の否定は自分と違ったものを否定することにつながります。アイヌの人たちもまた日本の経済的発展のために犠牲になってきました。

私は旅行が好きで北海道にも何度か行き、そのたびに本州と違った雄大な自然に感動します。しかし「その自然はすでにかなり破壊されていて、かつてはもっと豊かな自然があり、そこに暮らす人たちは豊かだった」という話に、自分がいかに自然の破壊に鈍感になっていて本当の自然を知らないかということ思い知らされました。また武田さんが海外を旅行するなかで環境

問題や少数民族に興味をもたれ、それが二風谷でのナショナルトラスト運動につながっていく話がありました。私自身、やはり国内や海外を旅行することが環境問題に関心をもつきっかけになったので、多くの人に環境問題に関心をもってもらうためには、実際に自然やそこに暮らす人びとにふれてみるのがいかに大切かを再認識しました。「チコロナイ」の運動もまた二風谷の自然を守るだけでなく、そこでの体験ツアーなどを通して多くの人に自然や人びととふれあってもらい、環境問題や先住民の問題に関心をもつ人を増やすことに役立っていくでしょう。

今回の講演会では、聞きに来られた人たちに意見や質問を出していただいて話し合う時間を多く取ったのですが、非常に多くの質問が出て講演会の時間では全く足りない状態でした。

また講演会の後の喫茶店での懇親会も、いろいろと話が盛り上がり楽しいものになりました。

## 「環境市民」ってどんなところ？

「環境市民」事務局 のうむら きとる 能村 聡

料理教室、英会話教室、旅行の企画と主催、買物ガイドづくり、修学旅行の実態調査、里山にうまく手を加えながら多様性豊かな森を守っていくこと、エコロジカルな畑づくり...これが「環境市民」がしていることです。

環境団体がなぜこんなことをしているのでしょうか？ 環境問題は大量のモノに頼った日常生活や行動そのものの問題であり、その解決には私たちの生活とそれを支える価値観を変えていく必要があるのは多くの人がうなずくところです。しかし抽象的な話では、実際の行動には結びつきません。

「楽貧料理教室」で環境や健康を考え楽しんで食生活を実践する知恵を身につけ、「みどりの英会話」では環境をテーマに英語も勉強、旅行はエコロジーツアーで環境を破壊せずに自然や文化を体感、買物ガイドではスーパーなどを環境への取り組みで評価して消費者に環境にいい買物をよびかけ、「エコ修学旅行研究」で京都を訪れる

若者に歴史文化に加えて自然環境の大切さを分かってもらう旅に変えていく。

もちろん、これだけでなく自然観察会、自然と人間のつながりを実感する環境学習、環境のことなら何でもテーマにする環境入門講座「野の塾」などもどんどん開催しています。

そして政府や自治体に積極的に環境政策をすすめるように提案すること、企業にイメージだけでなく生産、販売や経営方針の中心に環境保全を据えるように求めることを、そのベースとする調査研究とともに始めています。



「環境市民」主催、深泥池自然観察会の風景

また環境問題はいまや地球規模。欧米だけでなくアジアにも環境NGOが増えています。それらのNGOとネットワークし、国際的な視野のある活動を展開しようとしています。

こんな活動を年齢もさまざまな普通の人たちが集まって、楽しく真剣におこなっています。関心はあっても今まで行動していなかった人が次々ボランティアに加わっています。活動を支える専門家も多分野にわたっています。環境を考えたライフスタイルを自発的に選び取ろうとする人びとの輪はどんどん広がっています。このような一般名詞としての“環境市民”がふえていくことこそ、経済社会をエコロジカルに変えていく原動力なのです。私たちは地球環境と共生できるほんとうの意味で豊かな社会を作っていくために、お互いの個性や多様性を大切にしながら、緑の地球ネットワークのみなさんともこれから仲良く手をたずさえてともに歩んでいきたいと思っています。

『環境市民』連絡先

京都市中京区寺町御池上ル

トミタヤビル4F

Tel. 075-211-7462 Fax. 075-211-7464



## 第2回会員総会に参加して

GEN会員 浦田 勝美

先月号でお知らせしましたように、第2回会員総会が2月18日に開催されました。マックのことでお世話になっている杉谷久美子さんは、「GENの活動内容はまだよくわかりませんが、みなさんよくやっているな」と思い、会員になりました。ぜひ、ひとりひとりが活動できるように、ずっと続けてやってほしい。私も、友人にカンパをよびかけていきたいと思えます」と感想を語ってくれました。総会でも少しお話をさせていただいた浦田勝美さんからお便りが届きましたのでご紹介します。

中国の黄土高原から飛んでくる黄砂で大阪の空もかすむ季節がやってきます。その黄土高原に植林をして、緑の大地に蘇らせようという壮大な計画のことを世話人の高見さんより聞き、早速「緑の地球ネットワーク」に参加させていただいて3年ほどがたちました。

何もしない一会員ですが、第2回会員総会に参加して会の活動報告を聞き、討論に加わることで、次の点を習得することができました。

会はいまだ幼いですが、この3年の間にあげた成果は目をみはるものがありました。植林ツアー等を組織してかの地での植林に動員した人員の数からいって、また中国側に植林の費用として贈呈した金額もさることながら、こちら側から何でも押しつけるのではなく、中国側の主体性を尊重して現地の人びとと共に働き交流を深めてきた等の経験は、私の工場で現在進めている中国との合弁事業にとっても当会の活動スタイルは学ぶものが多々あります。

討論のときちょっとお話ししましたが、私はあの黄土高原に特別な感情をもつ者の一人です。1945年日本の敗戦後、八路軍（現在の人民解放軍）

に参加し1946年にはじまった内戦にあの黄土高原で3年近く働いた経験をもっています。あの当時はまだ日本軍がおこなった三光作戦の傷跡が多く残っていて、町や村はまともな家はほとんどなく瓦礫の状態、農民は自己の生命の維持がやっとの状況でした。そのようななかで、解放戦争の後方基地として人員と物資の供給を果たし、内戦を勝利に導く貢献をした場所なのです。このような歴史的な場所に、今では日本青年が植林をするということになり、あの地にかかわりのあった私にとっては隔世の感とともに、平和がやっとなってきた、平和が本物となってきたという感じです。

あの黄土地帯は有力な解放区であり、日本軍との戦いのときも根拠地でした。私は1958年帰国以来2度にわたりの地を訪問しお世話になった農民の方々と交流を深めてきました。今後は会員として会をつうじてかの地の方々と友好交流を深めたいと思っています。当会の益々の発展を願っております。

## 山西省の自然

石原 忠一

(92年緑化協力団団長)

### (28) 榆 (E l m)

山西省の省都太原のすぐ南東隣りに榆次市があり、さらに50kmほど南下しますと榆社と呼ぶ県城があります。おなじみの渾源のすぐ近くに北榆林という郷があり、桑干河をさかのぼると、南榆林が見つかります。地図をひろげてさがすと、榆の字のつく地名がまだいくつもみつかります。古来この地に立派な榆の大木や林があって、人びとの生活と深いかわりをもって保存されていたのでしょう。

榆科の植物は主として北半球に15属約200種が現存しますが、日本には5属10種でそのほとんどは中国にも分布します。大木になり建築材として尊重されるケヤキ(櫟)や、天柝棒や大八車の梶棒には欠かせなかったムクノキ(椋)や、国蝶オオムラサキが育つエノキ(榎)など、平地の代表的な秋に

落葉する喬木をふくみ、大阪の能勢町にも野間の大ケヤキと親しまれる、樹齢1000年をこえる天然記念物に指定されているものがありますが、なぜかニレ属の古木の天然記念物は残っていません。

ニレの木陰の学舎のイメージは、東北日本に多いハルニレで、なつかしい上野駅発のエルム号の名は、季節臨時寝台特急列車としてJRに残っています。

アメリカに帰化した Chinese Elm はアキニレです。西日本育ちの私の小学生時代、習字の時間、すずりにアキニレの葉をおいて摺るとねばりが出て、墨汁がいかにも達筆で書けそうな気がして、誰か悪童がもちこむとクラス中の流行になっていたのを思い出しました。

榆の語源は滑れという説があります。黄土高原のあちこちに、榆の大木が残っていたころの景観を想像してみるのはたのしいことです。



すっかり葉を落とした梢を天にのぼすニレの木

## 自然と人間を考える 六甲山ハイク

おひさしぶりの『自然と親しむ会』は、神戸市森林整備事務所の和田邦孝さんのガイドで、阪神・淡路大震災の被害をうけた六甲を歩きます。自然を、文明を、生活を、見て、聞いて、歩いて、考えてみませんか。

- 日時 5月28日(日)
- 案内 和田邦孝さん(神戸市森林整備事務所)
- ※集合場所、時間、参加費等は次号でお知らせします。
- ※小学校高学年以上程度のコースを検討中です。

## アジア・太平洋地域の 熱帯林は今

毎年日本の国土の約半分の面積の熱帯雨林が消失しているといわれ、アジア・太平洋地域の熱帯林は伐採されたあと、多くは日本で使われています。森と生活を考えるウータンの熱帯雨林連続講座Part2のご案内です。

- ◆「熱帯林と日本」篇
- 日時 5月20日(土) 18時～21時
- 場所 アピオ大阪(JR・地下鉄中央線森之宮駅・Tel.06-941-6332)
- ゲスト 荒川純太郎さん(アジアに学ぶ会代表・牧師)
- 参加費 800円(申込み不要)
- 問合せ Tel.0722-52-050西岡さん(夜間のみ)
- 主催 ウータン・森と生活を考える会

## 咲くやこの花館 「咲くや塾」のご案内

GENの代表の立花先生が技術顧問をつとめられる咲くやこの花館では、「咲くや塾」と題して3シリーズ(各シリーズ4回)の講座を1年間にわたって開講します。シリーズ1は、「熱帯雨林の生態」。各回の内容は次のとおりです。

- 第1回 咲くやの熱帯植物(その1) ◎開講日 4月30日(日) ◎講師 立花吉茂氏(花園大教授)
- 第2回 世界の熱帯雨林 ◎開講日 5月28日(日) ◎講師 内村悦三氏(大阪市大理学部付属植物園教授)
- 第3回 熱帯雨林の植物 ◎開講日 6月25日(日) ◎講師 小川房人氏(大阪市大名誉教授)
- 第4回 熱帯林の現状と問題点 ◎開講日 7月23日(日) ◎講師 依田恭二氏(大阪市大教授)

- 時間はいずれも13時30分～15時30分
- 場所 咲くやこの花館2F 咲くやインフォメーションセンター
- 対象 一般(18歳以上)
- 定員 60名(電話申込み要、定員になり次第しめきります。受講講座選択可)
- 受講料 無料
- 申込み・問い合わせは: 咲くやこの花館・運営課 Tel.06-912-0055(9時30分～17時)



## レターセットを つくりませんか?

オフィスで毎日山のように使うOA用紙。白いまま無駄にしてしまう部分も多く、緑を守るGENのメンバーとしては、そのまま捨ててしまうのに抵抗を感じている人も多いのでは?そこで、OA用紙の無駄にしてしまう部分をリサイクルして、レターセットを作ってみました。作り方の講習会を開きますので、興味のある人はふるってご参加ください。

- 日時 5月27日(土) 13時～
- 場所 GEN事務所(JR環状線・地下鉄中央線「弁天町」駅徒歩1分)

### 長倉洋海写真展

## いま、人間の世紀へ -南アフリカ、アマゾンから-

戦争、人種差別、環境破壊という厳しい現実のなかで、貧しく困難があっても人間らしさや心の豊かさを失わず、自らの文化を持ちつづけようとする人びとを撮りつづけてきた写真家、長倉洋海。その作品から、南アフリカ、アマゾンの写真100点を展示します。

- 日時 5月19日(金)～27日(土) 10時～20時(最終日17時)
- 場所 高槻市生涯学習センター 1F展示ホール
- 入場料 500円(中学生以下無料)
- 講演 5月20日(土) 15時～ 3F研修室(要予約)
- 主催 長倉洋海写真展実行委員会 Tel.0726-72-7513

## 土佐小夏をどうぞ

芦屋市民学生救援隊で高知の田中さんのご子息にであった高見さん。「ジュニアの時代だねー」と感慨深げでしたが、まだまだお父さんもがんばりま。初夏のたよりが届きました。

- 小夏(低農薬有機栽培)
  - ・LM混 5kg 3,800円
  - ・S/2S混 5kg 3,300円
- ※送料(関西620円)は別途
- 出荷は4月20日から5月下旬まで。
- ご注文は: 〒781-74 高知県安芸郡東洋町甲浦 田中隆一さん Tel./Fax.08872-9-2500
- 売上の一部が緑化基金になりますので「GENの紹介」と一言そえて下さい。

## 防災対策に緑地を! シンポジウム

あの阪神大震災の激しい揺れにも倒れず、火災の延焼や家屋の倒壊を防いだ樹木。神戸市の担当者にも参加を依頼して、都市防災計画のなかで緑地をどう位置づけるかを考えます。

- 日時 5月24日(水) 13時～16時
- 場所 リサイタル・ホール(フェスティバル・ホールの下) (地下鉄四ツ橋線・肥後橋駅)
- 主催 朝日新聞社・森林文化協会
- 講師 田中まゆみさん(主婦) 宮本憲一氏(立命館大教授) 森本幸裕氏(大阪府大教授) 行政担当(神戸市の担当者)
- 司会 岡部漱介・朝日新聞編集委員
- 入場 無料